

「妙なる調べ」

立原透耶

きつくきつく食いしばった歯の隙間からびう、という音が漏れた。

それは男が探して探して探し求めて、それでも得られなかった、美しい音を奏でていた。

これこそが至上の音楽。

その音を魂に刻み込むため、男は女を、子供を、年寄りを、美しいものを、醜いものを、一つ一つ丁寧に、その首を締めていった。

細くて折れそうで、けれどもしなやかで弾力性のある首と、隙間のない整った歯の組み合わせが最も素晴らしかった。

男のゴツゴツした首からは良い音楽はこぼれない。

美しい音、世界中で最も素晴らしい音。

けれども、この世のものとも思えぬ妙なる調べを耳にしたのは、男の首に縄がかかった瞬間だった。絞首台から落ちながら、男は最初に最後の、至高の音楽を自ら発し、自らの耳で聞いた。